

第I部 奈良・平安時代の様相

現在の行政区分の山形県を指す古代の国名は出羽国である。『続日本紀』和銅元年（708）9月28日条に越後国より北方に突出したところに出羽郡を置くという記事が載る。おそらく現在の庄内地方の南部を越後国から割いて郡域としたものであろう。同時に出羽柵が置かれたと考えられる。

4年後、『続日本紀』和銅5年（712）9月23日条に出羽国を置くとある。さらに『続日本紀』和銅5年（712）10月1日条に「陸奥国最上・置賜二郡を割きて出羽国に隸せしむ」と見え、ここに山形県の全域が出羽国として成立する。この年から数えて平成24年（2012）は1300年となる。

国府は、『三代実録』仁和3年（887）の記事に「国府在出羽郡井口地」と見え、酒田市本楯に所在する「城輪柵跡」がこれに当たると考定されている。

古代出羽国では、現在の山形市周辺と考えられる最上郡も、もう一方の拠点として重要であった。

『日本三代実録』仁和3年（887）5月20日条には「遷建最上郡大山郷保土野」と見え、国府を庄内地方出羽郡から最上郡へ遷移する旨が記される。この時期最上郡は国府の存在を支えることができる地域性を保持していたことがわかる。

当時の様子を考古学資料を中心としてふりかえってみよう。



第II部 鎌倉・室町時代の様相

平安時代末から鎌倉時代にかけて、奥州藤原氏の勢力解体と源頼朝を頂点とする鎌倉幕府権力の侵入があった。山形の荘園にも地頭に任命され、鎌倉の御家人がしだいに荘園を支配していった。ついで南北朝時代は全国的な争乱があった時代であったが、この時期を画期として物資の流通や宗教や信仰などの実態もおおきな変革があった。

当時の生活を歴史資料や陶磁器などからふりかえってみよう。



第III部 戦国時代の様相

最上氏は最上義光の時には勢力を拡大して戦国大名となり伊達氏と抗争した。最上氏の拠点である山形城下（山形市）では、発掘調査が進展し16世紀末～17世紀初めの最新流行の陶磁器群が見つかった。東海地方の陶磁器や九州地方の陶磁器などが日本海舟運の発達によってもたらされ城下町の建設も進んだ。

当時の様子を新発見の絵図や史料、さらには陶磁器などからふりかえってみよう。



第IV部 江戸時代の様相

元和8年（1622）、山形城主最上氏が改易になると、その領地はいくつかに分割支配されるようになった。現在の山形に鳥居氏、鶴岡に酒井氏、真室川に戸沢氏（後に新庄に移る）、上山に松平氏が入部し、幕府の直轄地（天領）も置かれた。鶴岡藩（庄内藩）酒井氏や新庄藩戸沢氏、それに以前からあった米沢藩上杉氏は幕末まで続いた。江戸時代の山形は、村山・最上・置賜・庄内の各地が異なった歩みを見せた。

当時の生活を紅花と最上川、さらには日本海舟運を通してふりかえってみよう。



第V部 明治時代の様相

山形の明治時代は日本の政治的状況に連動しおおきな変革があった。江戸幕府が滅亡しかわって明治政府が成立し、政治や経済など制度が変化した。山形にも近代的建築があらわれ、さらにはそれまで独立的だった4地域が統一山形県としてまとまり、現在の県域が確定した。最初の県令が三島通庸である。

三島通庸が建設をすすめた、山形の様子などをふりかえってみよう。

